季刊

博物館だより

99

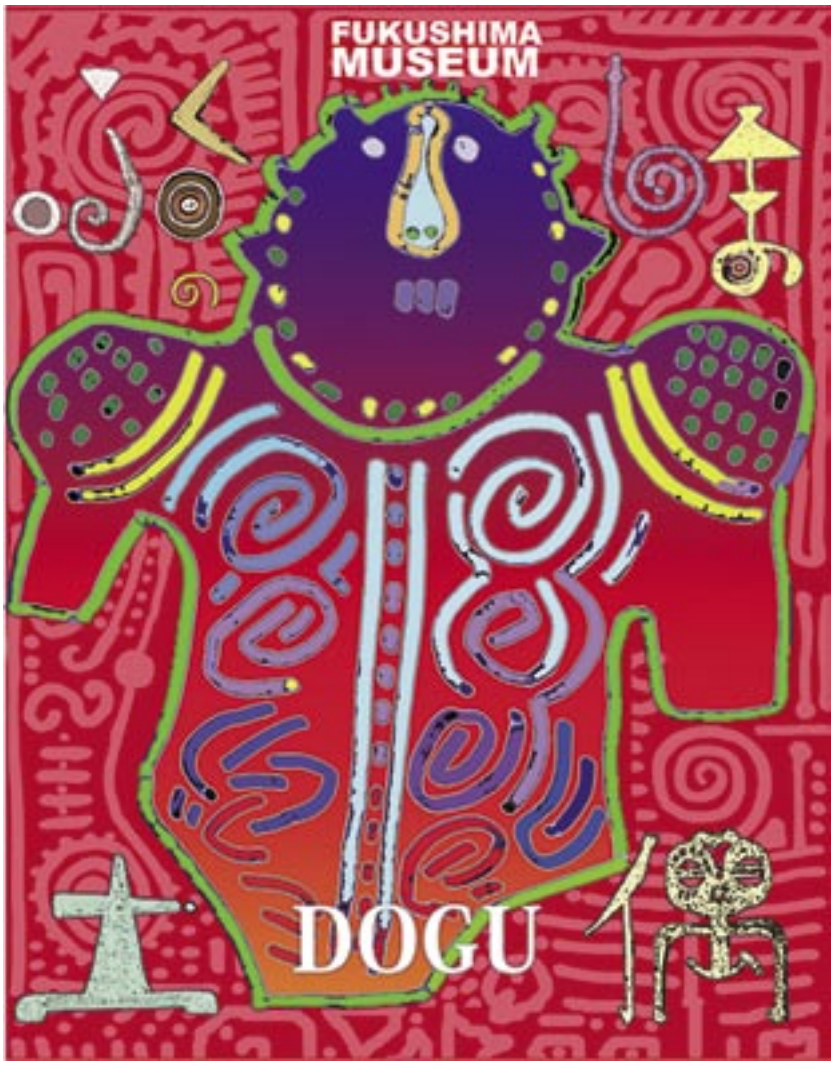
FUKUSHIMA MUSEUM QUARTERLY

URL http://www.general-museum.fks.ed.jp

冬の特集展

ふくしまの土偶

福島県立博物館



冬の特集展（まほろん移動展）

ふくしまの土偶

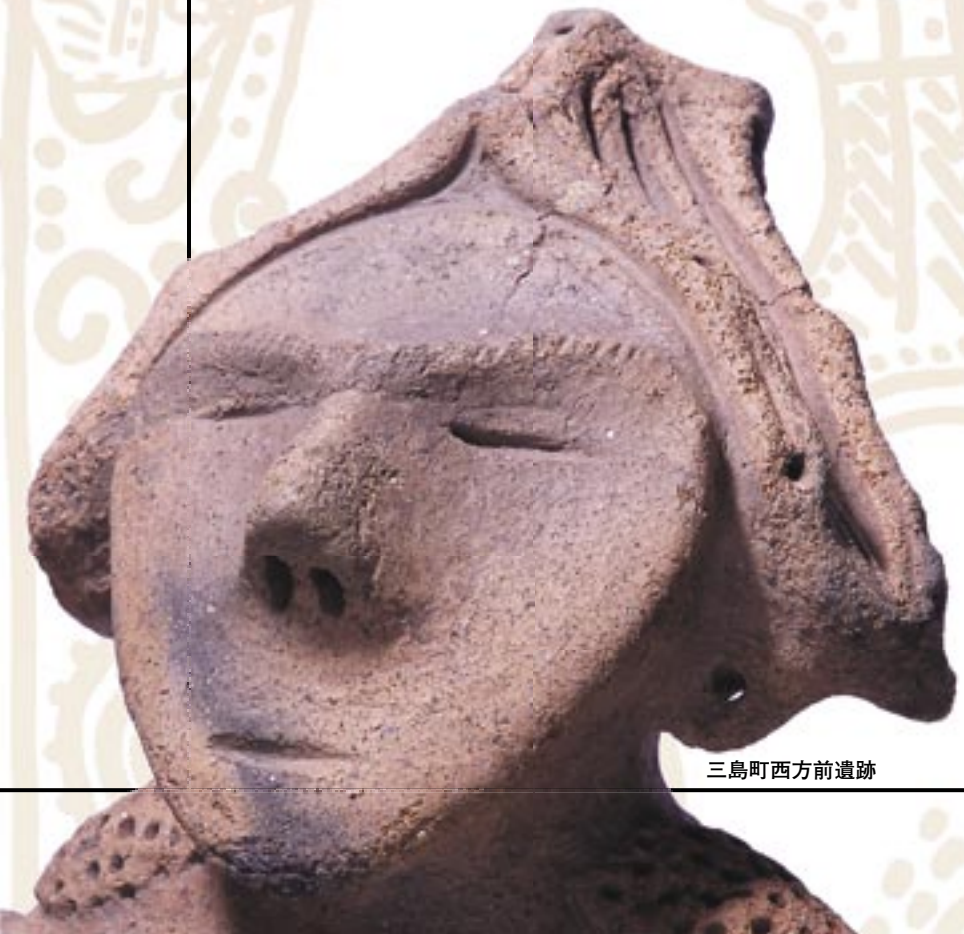
二〇一〇年一二月七日（火）～二〇一一年一月三〇日（日）

福島市上岡遺跡

この冬の特集展は、まほろん（福島県文化財センター白河館）の企画展の移動開催展示です。土偶は縄文時代早期から数千年にわたって作られ続けた粘土を素材にした〝ひとがた〟です。妊娠した女性を表現しており、生命の再生を願って作られたものと考えられます。

昨年、大英博物館において開催された「The Power of DOGU」に出品された福島市上岡遺跡のうずくまる土偶、郡山市荒小路遺跡のハート形土偶、三島町小和瀬遺跡の髪を結った土偶（レプリカ）をはじめ、福島県内から出土した縄文時代の土偶が勢ぞろいします。また県内から出土し、東北大学文学研究科が所蔵する会津坂下町竈原遺跡出土土偶も里帰りします。

主催：福島県立博物館・まほろん（福島県文化財センター白河館）



三島町西方前遺跡

（表紙）モデル：会津若松市墓料遺跡出土土偶

郡山市荒小路遺跡

郡山市曲木沢遺跡

三島町柴原Ａ遺跡

■展示の構成

里帰りした土偶
縄文早期・前期の土偶
縄文中期の土偶
縄文後期の土偶１
縄文後期の土偶２
縄文晩期の土偶

■関連イベント

(1)講演会「土偶のはなし」

講師：前弘前大学教授　藤沼邦彦氏
日時：平成二三年一月一六日(日)
　　午後一時三〇分～
会場：福島県立博物館講堂

(2)展示説明会

平成二三年一月一六日(日)
午後三時一〇分～

入館料：常設展観覧料金
　小中高学生　無料
　一般・大学生　二六〇円(二〇名以上の団体は二一〇円)

休館日：平成二三年一月一日(土)～四日(火)
　一一日(火)・一七日(月)・二四日(月)

イベントレポート

秋の企画展「漆のチカラ―漆文化の歴史と漆表現の現在―」関連事業

「アーティストトーク」

日時：一〇月九日（土）一三：三〇～一四：三〇
講師：漆造形家　藤田敏彰さん、漆造形家　松島さくら子さん、現代美術家　中島靖高さん、彫刻家　保井智貴さん

企画展開幕初日に行われた出品作家によるアーティストトーク。企画展のサブタイトルは、それぞれ二部構成の展示のテーマとなっており、後半の「漆表現の現在」では漆を用いて新しい表現に取り組んでいる五人の作家の作品を紹介しました。残念ながら欠席となってしまった田中信行さん以外の四人のみなさんが、作品の前で「漆で何を表現しようと考えているのか」「漆のどこに魅力を感じるのか」などのお話しを聞かせて下さいました。参加者は一般の方から漆芸に関わる方、作家さんなど三〇名ほど。みなさん熱心に耳を傾け、作家本人の思いを聞けるまたとない機会を満喫してくださったようです。

アーティストトーク

記念講演会「漆の文化史―9000年の時を越えて」

日時：一〇月三一日(日)一三：三〇～一五：〇〇
講師：石川県輪島漆芸美術館長　四柳嘉章さん

漆考古学の第一人者・四柳嘉章さんによる講演会は、縄文時代から近世までの日本の漆文化を出土品や伝来品に基づいてご紹介くださるものでした。特に豊富な出土品の画像や詳細なデータによって、長い年月にわたって人々が漆にどのような観念を寄せてきたのかや、素材としての漆の素晴らしさが実感をともなって理解できました。九〇〇〇年の時をあっという間に遡った一時間半が短く感じる充実した講演会でした。

記念講演会「漆の文化史―9000年の時を越えて」

福島県文化施設6館連携事業「The Voice of（漆）」リーディング

日時：一一月二日（火）一六：三〇～一七：三〇
講師：詩人　吉増剛造さん
会場：スペースアルテマイスター

漆のチカラ展に関連して福島県の文化施設6館連携事業として『ふくしまうるし物語』という本を制作しました。文化施設のうち、福島県立図書館、福島県歴史資料館、福島県立博物館を舞台にして5名の方が執筆したエッセイ集です。執筆者は小説家の室井光弘さん、玄侑宗久さん、詩人の吉増剛造さん、和合亮一さん、そして当館館長赤坂憲雄です。みなさんの共通テーマは「漆」。そして福島の文化施設のいずれかが舞台であることが条件でした。詩人の吉増剛造さんは、福島県立博物館を取材。展示室や収蔵庫の縄文時代の漆製品から強い印象を受けて生みだされたのが「The Voice of（漆）」という作品です。ご本人によるリーディングイベントでは、会津、福島県立博物館そして漆への吉増さんの温かくも情熱的な思いが伝わり、作品への理解をさらに深めることができました。

『ふくしまうるし物語』は県立博物館総合ガイダンスで無償配布しております。ぜひご一読ください。数に限りがありますのでお早目に。

（美術担当：小林めぐみ）

「The Voice of（漆）」リーディング

土偶（どぐう）

Q&A

回答者 考古担当 こぼし博士

Q：土偶と埴輪はどこがちがうの？

A：下の写真の左が土偶で、右が埴輪じゃ。土偶ってのは、縄文時代につくられた女性の神さまの像と言っていいじゃろう。古いものは一万年も前のものがある。新しいものは二千三百年くらい前かのぅ。それに対して埴輪は、古墳時代に古墳の上に立てならべられたもので、人間のすがたのほかに、鳥やシカや馬などの動物、家や船や刀などの財産をかたどったものもある。今から千六百年から千五百年くらい前のもので、土偶よりはるかに新しいものじゃよ。埴輪はお葬式のようすを表したものとか、亡くなった豪族があの世で不自由しないようにつくって供えたものとか言われておるのぉ。

Q：土偶で髪型もわかるの？

A：縄文晩期には髪を結った土偶や、かぶり物をしているような表現のある土偶が多いんじゃ。頭から角のようなものが突き出しているのも、ヘアースタイルと考えられておる。三島町の荒屋敷遺跡から出土した漆塗りの土偶のヘアースタイルを復元してくれた美容師さんは「日本髪の結い方にとてもよく似ていますね」と言っちょったよ。こんなところにも縄文の伝統があるのかもしれんのぉ。髪は人のいちばん高いところにあるから、天の神さまとはいちばん近い。「髪」で「神」と交信するのかもしれんなぁ。残念ながら、わしはもう交信できないがのぉ…。

Q：土偶は何のためにつくられたの？

A：むかしから考古学者はこれを考えてきたんじゃが、謎、謎、謎じゃなぁ。これまで言われてきたのは、安産護符説、神像説、呪物説、玩具説、災厄転嫁説などいろんな説がある。

ここであらためて土偶の特徴を考えてみよう。

①妊娠した女性を表現している
②ほとんどのものが壊れている
③壊された後に接着し直されるものもある
④祭りの場と考えられる特別な場所から出土することもある
⑤お墓から出土することもある
⑥日常の道具よりはるかに数が少ない

このようにみると、どうも日常ではないお祭りに登場するもので、生命がたくさん生まれてくることと、死んだものが再び生まれてくることを祈り願って作られたんじゃないかと考えられようのぉ。つまり子孫繁栄と再生じゃ。ただし、縄文人もみんなが同じ考えでつくったとも限らんぞ。まだまだ研究の余地はありそうじゃな。

（文責　考古担当　森　幸彦）

こぼし博士

わたしたちは「どぐう」です

わしらは「はにわ」です

冬の特集展（まほろん移動展）
「ふくしまの土偶」

会期　平成二二年一二月七日（火）～平成二三年一月三〇日（日）

場所　福島県立博物館収蔵資料展示室

※常設展観覧料でご覧になれます。

研究ノート

「土偶の背中～背面人体文土偶」

森　幸彦　考古担当

土偶は乳房と膨らんだお腹の表現が特徴的で、ほとんどのものが妊娠した女性―女神の像と考えられている。前から見るとなるほど誰もがうなずける。ところが、土偶の背中がおもしろい。ある時期の土偶の背面には前面から見た造形とは別の「人体」らしき絵（図像）が描かれているのである。

その時期とは縄文時代中期後葉、今から四千年～四千二百年ほど前で、福島県域を中心に住居の中に「複式炉」[※1]が取り入れられ、各地に大きな集落が形成される頃である。

図1の本宮市高木遺跡の土偶は、形そのものが変わっている。棒状なのである。その頭部には、くぼんだ目、隆起した鼻、線描された横長楕円形の口が表現されており、中ほどには盛り上がった乳房がある。明らかにこちらが前面である。その反対側である背面を見てみよう。線描されたその全体像は、私の目には、丸い頭があり、手足を広げてバンザイをしている人の姿に見える。しかも胸には脊椎と肋骨を表現したようなY字がふたつ重なっている。更には両脇にそれぞれ獲物のようなものを抱えている。一方、この図像を追いつつ、また表面に戻ると、先ほど口に見えていた部分が頭に見え、その下に広げた両腕、乳房の間に渦巻き、その下は足の表現のように見えてくる。

この資料を発掘した大河原勉氏はこの棒状の形を男根と見て、これを両性具有の土偶とし、線描の人体文は狩りをしている人物表現と見て、狩猟儀礼に用いられた土偶と判断している。[※2]

このように背面にバンザイをしたような人体文のある土偶は、福島市の和台遺跡でも多数出土しており（図2）、県下では数十に達するとみられる。

もし、この背中のバンザイ人体文が男性であるという確証が得られるならば、土偶という本来女神であるべき造形の中に、男神的要素が入り込んでいるという重要な指摘が可能となるだろう。

実は、このような現象が、和台遺跡出土資料にその最も古い形態がみられる「狩猟文土器」にうかがい知ることができる点を、斎野裕彦氏が明らかにしているのである。[※3]着目点は手の「丸」と「尖」の表現の違いで、それが男女表現の区別であるという。土器という本来女神が宿るべき器物に男神が入り込んでくるのである。狩猟文土器が広く東北地方に伝播するのは縄文後期であるが、中期の段階で阿武隈川中流域の土器と土偶に男神が入り込む現象が現われ、東北北部に影響を与えたということになる。

（前面から背中にかけての拓本図）

図１　本宮市高木遺跡の土偶

一方、土偶の背中に人体文らしき図像のある土偶が、中部高地（主に長野県や山梨県）や関東西部（東京都・神奈川県西部）を中心に中期後葉の時期に分布していることは、すでに安孫子昭二氏によって指摘されており、「背面人体文土偶」と呼ばれている。[※4]これらは、高木遺跡例のように明瞭ではないにしろ、バンザイをした腕が土偶の脇の下に伸びるところが共通している。

図２　福島市和台遺跡出土土偶の背面

東北地方南部における「背面人体文土偶」の研究は、まだ、手つかずの状況といえる。まずは土偶の背中を集成していく必要がある。

縄文時代中期と後期では住居の構造や集落のあり方が大きく変わるといわれている。その変革期にあたるのが、縄文時代中期後葉という時期。この時期に流行する複式炉を持つ住居、それらが構成する集落やそこで用いられた生活用具、さらに集落同士のネットワーク、これらの総体を「複式炉文化」と呼ぶとすれば、土偶に表れた信仰形態の変化（女神信仰に男神が入り込む）は、この「複式炉文化」の実態解明に迫る糸口になるかもしれない。

※1　燃焼部が複数ある大型の炉
※2　『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告書3　高木・北ノ脇遺跡』福島県教委　二〇〇三年
※3　「狩猟文土器と人体文」『原始絵画の研究』六一書房　二〇〇六年
※4　「背面人体文土偶」『土偶研究の地平』勉誠社　一九九八年

トピックス

テーマ展

天神さま
―絵巻物から郷土玩具まで―

会　期：平成23年2月26日（土）～4月17日（日）
会　場：部門展示室「歴史・美術」
観覧料：一般・大学生／260円　小中高生／無料
　　常設展観覧料でご覧いただけます。

歴史学者真壁俊信博士（喜多方市出身）の収集した絵巻物などの歴史資料や全国各地の郷土玩具を中心に展示して、学問の神さま菅原道真・天神さまの歴史を広く紹介します。

北野天神縁起絵巻第一巻（国宝の模本）

渡唐天神像（左）と住吉神像（右）

会津の天神さま（張子）

◎関連行事

日　時：平成23年3月5日（土）13：30～15：00　当館講堂　入場無料
講　演：歴史講座「天神さま信仰の流れ」
講　師：歴史学博士　真壁俊信氏
内　容：テーマ展「天神さま―絵巻物から郷土玩具まで―」にちなみ、学問の神さま菅原道真・天神さま信仰の歴史について、わかりやすく講演していただきます。

春の特集展　予告

永山亘コレクション展

■会期　平成二三年三月五日（土）～五月一五日（日）

みなさん常磐炭田はご存知ですか。映画「フラガール」の舞台になった所と言えばおわかりでしょう。江戸時代末期、いわき市南部の弥勒沢（みろくさわ）で石炭の鉱脈が発見されてから掘られ続け、日本の経済発展に大きな貢献をしました。

いわき市内郷在住の永山亘（わたる）さんは、戦後約三〇年にわたり常磐炭礦で事務職として働くかたわら、炭砿関係の資料をたくさん集められました。収集した資料は、採炭道具、坑道内での安全器具、軌道用の機具、炭砿住宅での生活道具、労働組合の資料など多岐にわたり、今ではほとんど手に入らない貴重なものばかりです。このたび永山さんのご厚意で、炭砿の資料が一括博物館に寄贈されました。この機会に寄贈資料を公開します。

戦後の経済復興を支えた炭砿の盛況ぶり、そこで懸命に働いた人々の生活や文化を感じとっていただければと思います。ぜひご観覧ください。

（自然担当　竹谷陽二郎）

軌道用信号灯

information

特集展

常設展料金でご覧になれます

冬の特集展（まぼろん移動展）
「ふくしまの土偶」
会期　1月30日（日）まで
◎冬の特集展関連行事
講演会「土偶のはなし」
日時　1月16日（日）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　前弘前大学教授　藤沼邦彦さん
展示解説会
日時　1月16日（日）15時10分～
会場　福島県立博物館展示室内
講師　学芸員　森幸彦
春の特集展
「永山亘コレクション展」
会期　3月5日（土）～5月15日（日）

テーマ展

「ふるさとの考古資料1―【会津若松市】遺跡探訪―」
会期　5月15日（日）まで
「昭和のくらし―あの頃の家電製品―」
会期　3月21日（月）まで
「相馬地域の干拓」
会期　3月31日（木）まで
「ふくしまの画人たち」
会期　1月9日（日）まで
「書に込めた心」
会期　1月15日（土）～2月13日（日）
「天神さま―絵巻物から郷土玩具まで―」
会期　2月26日（土）～4月17日（日）
テーマ展関連
歴史講座「天神さま信仰の流れ」
日時　3月5日（土）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　歴史学博士　真壁俊信さん

ポイント展

「死者を見守る顔」
会期　3月27日（日）まで
「おばあちゃんの記憶―こたつ掛け―」
会期　1月30日（日）まで
「塩沢上原A遺跡の石器」
会期　3月27日（日）まで
「会津孝子伝」
会期　1月13日（木）～3月30日（水）
「小さな雛まつり」
会期　2月22日（火）～4月3日（日）

ミュージアムイベント

「館長サタデープロジェクト『福島近代文化遺産を考える1』」
日時　1月15日（土）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　福島県教育庁文化財主査　荒木隆さん　館長　赤坂憲雄
「館長サタデープロジェクト『福島近代文化遺産を考える2』」
日時　2月19日（土）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　館長　赤坂憲雄ほか
「館長サタデープロジェクト『福島近代文化遺産を考える3』」
日時　3月19日（土）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　館長　赤坂憲雄ほか

木曜の広場

『遠野物語』を読む10
日時　1月6日（木）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　館長　赤坂憲雄
『遠野物語』を読む11
日時　2月3日（木）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　館長　赤坂憲雄
『遠野物語』を読む12
日時　3月3日（木）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　館長　赤坂憲雄

講演・講座

※は要申込

○民俗講座
映像から学ぶ民俗学4「会津の初市」
日時　1月8日（土）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　学芸員　佐々木長生
○歴史講座
人物シリーズ4「書で読む戊辰戦争」
日時　1月22日（土）13時30分～15時
会場　福島県立博物館講堂
講師　学芸員　阿部綾子
○実技講座
※「布ぞうり1」
日時　1月23日（日）13時30分～15時30分
会場　福島県立博物館実習室
定員　10名（小学4年生～高校生）
参加費　500円
講師　エコの種代表　土田晶子さん
※「布ぞうり2」
日時　2月27日（日）13時30分～15時30分
会場　福島県立博物館実習室
定員　10名（小学4年生～高校生）
参加費　500円
講師　エコの種代表　土田晶子さん
○体験講座
※「時代衣装で解説会～親と子で楽しむ衣装講座～」
日時　3月13日（日）13時30分～15時
会場　福島県立博物館体験学習室・常設展示室
定員　定員15名　小学生と保護者
参加費　無料　保護者は常設展観覧料が必要
講師　展示解説員

その他の共催

北日本近世城郭検討会「神指城跡と東北地方諸城の様相」
日時　1月30日（日）10時～16時30分
会場　福島県立博物館講堂
講師　北日本近世城郭検討会会長　鈴木　啓さんほか
ゆめ寺子屋講座「犯罪の現状と対策」
日時　2月10日（木）10時～12時
会場　福島県立博物館講堂
講師　会津若松警察署職員
NPO法人はるなか講座「棉操り・糸紡ぎ講習会」
日時　2月20日（日）13時30分～15時30分
会場　福島県立博物館実習室
講師　学芸員　榎　陽介

やさしい展示解説

＊展示解説員による常設展総合展示の案内です。
＊毎週土曜日、日曜日の11時と14時から30分ほど行います。

＊要申込の行事は基本的に開催日の1ヶ月前から募集を開始しますが、異なる場合もありますのでお問い合わせください。
＊その他、行事等の詳細に関しましては、月行事予定やホームページをご覧ください。

1月～3月の休館日

1月　1日（土）～4日（火）・11日（火）・17日（月）・24日（月）・31日（月）
2月　7日（月）・14日（月）・21日（月）・28日（月）
3月　7日（月）・14日（月）・22日（火）・28日（月）

季刊博物館だより　99号　2010年12月26日発行　編集・発行　福島県立博物館　〒956-0807　会津若松市城東町1-25　TEL0242-28-6000　印刷　株式会社アポロ　会津若松市七日町14-7　TEL0242-22-5139

リサイクル適正◎